

## II-5 脊椎・脊髄損傷患者の合併損傷が社会的予後に与える影響

○附田愛美 熊谷玄太郎 和田簡一郎 浅利 享 新戸部陽士郎  
石橋恭之  
(弘前大学大学院医学研究科 整形外科科学講座)

**【背景】**外傷性脊髄損傷は、脊髄実質が外傷を契機として損傷部以下の知覚・運動・自律神経系の麻痺を呈する病態である。脊髄損傷は、しばしば他部位の損傷を合併するが、合併損傷の有無と社会的予後の関連は明らかではない。本研究の目的は、脊髄損傷患者が合併損傷を有することで、生活場所や職業復帰に影響を与えるかを調査することである。

**【方法】**対象は当院に搬送された脊椎・脊髄損傷患者 101 例(平均年齢 62.7±14.7 歳)、男性:76 例、女性 25 例、初診時 ASIA impairment scale (AIS)、A:6.9%、B:3.9%、C:12.8%、D:25.7%、E:50.4%)である。調査項目は、年齢、性別、BMI、既往歴、受傷時の職業などの患者情報、受傷機転や損傷高位、合併損傷、初診時と最終観察時の AIS などの受傷情報、社会的予後である。合併損傷は Abbreviated Injury Scale 2008 に従い分類し、責任高位以外の損傷の有無で単独群、合併群と定義した。外傷重症度は Injury Severity Score (ISS)で評価した。社会的予後は最終観察時の生活場所(自宅、施設、病院)、職業復帰率で評価した。

**【結果】**合併損傷は 68 例 (67.3%)で認めた。合併群の損傷は、頭部、顔面外傷が胸椎高位の損傷に 50%に合併した。胸部損傷は胸椎高位の損傷で 32%に合併した。複数の脊椎および四肢損傷は全高位の脊椎損傷で 63%に合併した。両群間で年齢、性別、BMI、既往歴は有意差を認めなかった。受傷機転は両群とも高所転落、転倒の割合が高く、単独群で転倒の割合が有意に高かった。損傷高位は両群とも頸椎高位が半数以上を占め、単独群で非骨傷性頸髄損傷が有意に多かった。ISS は単独群/合併群: 20.3 ± 8.3 / 19.3 ± 10.2 で有意差を認めなかった。最終観察時の生活場所は単独群/合併群: 自宅 65.6 / 82.6%、施設 21.8 / 10.1%、病院 12.5 / 7.2%であった。多変量解析では自宅復帰には年齢(Odds ratio 1.10, 95%CI 1.02-1.18)、最終観察時の AIS (Odds ratio 0.18, 95%CI 0.08-0.38)が関連していた。職業復帰率は 36.3 / 54.7%であり、有意差を認めなかった。多変量解析では職業復帰には年齢(Odds ratio 1.06, 95%CI 1.01-1.2)が関連していた。

**【考察】**自宅復帰には、麻痺の重症度が、職業復帰には、重度多発外傷が復帰に影響することが報告されている。本研究では自宅復帰あるいは職業復帰とも、合併症の有無よりも年齢が関連する因子となるため、受傷時に高齢であれば、介護保険制度の利用など早期から検討する必要がある。

**【結語】**脊椎・脊髄損傷患者の合併損傷は高頻度に発生した。脊髄損傷の社会的予後に関連する因子は、合併損傷ではなく麻痺の重症度と年齢であった。